ふくい統計リポート

平成 27 年 3 月 31 日

No.11　家計調査から見る福井のすがた

はじめに

近年、一昔前に比べて「県民性」を取りあげる番組や書物を目にすることが多くなった。地元では当たり前のことが、一歩外に出ると当たり前ではない。県外・市外あるいは国外に出てはじめて地元ならではの生活文化や食文化に気づくこともしばしばあるのではないだろうか。「郷に入れば郷に従え」ということわざもあり、自分の生活圏から外へ出ると、そこでは必ず新しい文化と出会うことになる。

今回の統計リポートでは、そういった文化の違いについて都道府県庁所在市別という枠組みで福井市の特徴を全国で実施されている家計調査を用いて見ていく。

家計調査とは

まずはこのリポートで主に使用する家計調査の内容について説明する。家計調査とは、国民生活における家計収支の実態を明らかにし、国の経済政策、社会政策の立案のための基礎資料を得ることを目標とする調査である。調査の対象は、学生の単身世帯を除いた全国の全世帯であるが、外国人世帯・料理飲食店、旅館または下宿屋を営む併用住宅の世帯など収支を正確に測ることが難しい等の理由から、一部の世帯を除外している。調査の方法としては、学生の単身世帯等を除いた全国の世帯から抽出し、選定した約 9,000 世帯を調査し、その結果から全国の世帯の家計収支を推定する標本調査である。

また、家計調査では都道府県別に表章するように標本設計を行っておらず、標本規模も小さいことなどにより、全国結果に比べ結果精度が十分に確保できないとみられることから、今回のリポートでは年平均や複数年平均を利用する。

生活の豊かさの度合い～エンゲル係数～

エンゲル係数とは、生活水準の高低を表す指標として用いられ、一般にエンゲル係数が低いほど生活水準が高いとされている。家計調査においては下記のとおり、２つの項目からエンゲル係数を算出している。

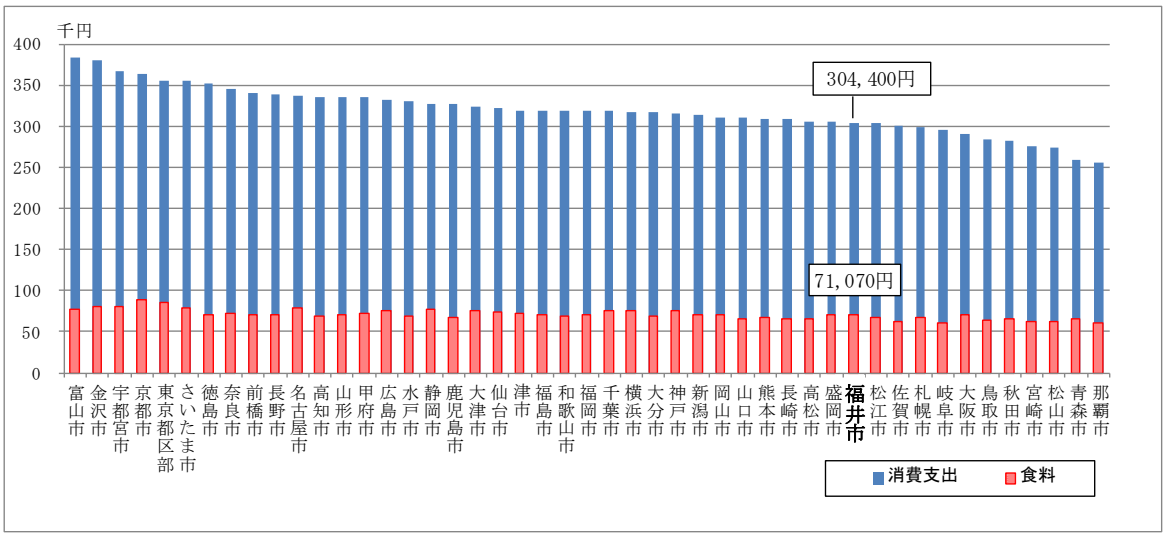
エンゲル係数　＝　食費　／　消費支出　×　１００　…　①

エンゲル係数が低いほど生活水準が高いというのは、①の数式上で分子の食費が少なくなる、あるいは分母の消費支出が大きくなることが要因である。食費は、生命維持には欠かせないものであり、他の嗜好品に比べ極端に節約するのが困難であるため、①の数式上、

食費が少なくなるよりも消費支出が大きくなることが影響する。つまり、消費支出が大きい＝食費以外に使えるお金が多い、ことから生活水準の高低を表す指標として用いられるのである。

図１　都道府県庁所在市別の消費支出と食料費

（平成２６年平均・二人以上の世帯のうち勤労者世帯）



では、実際に都道府県庁所在市別のエンゲル係数と福井市の推移状況についてみていきたい。図１は、各都道府県庁所在市の消費支出および食料費を消費支出の多い順に並べ替えたものである。福井市の消費支出は全国３６番目で 304, 400 円であり、食糧費は 71, 070 円で全国２０番目であった。この数値を用いて作成したのが図２のエンゲル係数である。図２をみると、２位京都、３位大阪府など大都市圏に次いで１１番目であり、エンゲル係数の定義によれば、全国に比べると生活の質はやや低いということになる。ただし、図３のとおり、地方よりも大都市圏の方が外食費への出費が比較的大きいため、エンゲル係数が高くても生活の質が低いとは限らない。また、近年の傾向では、支出に占める固定費（住居や光熱・水道等）や他の支出が多いと食費が削られるため、エンゲル係数が低くなるというエンゲル係数の逆転現象が起きる場合がある。

図２　都道府県庁所在市別のエンゲル係数

（平成２６年平均・二人以上の世帯のうち勤労者世帯）

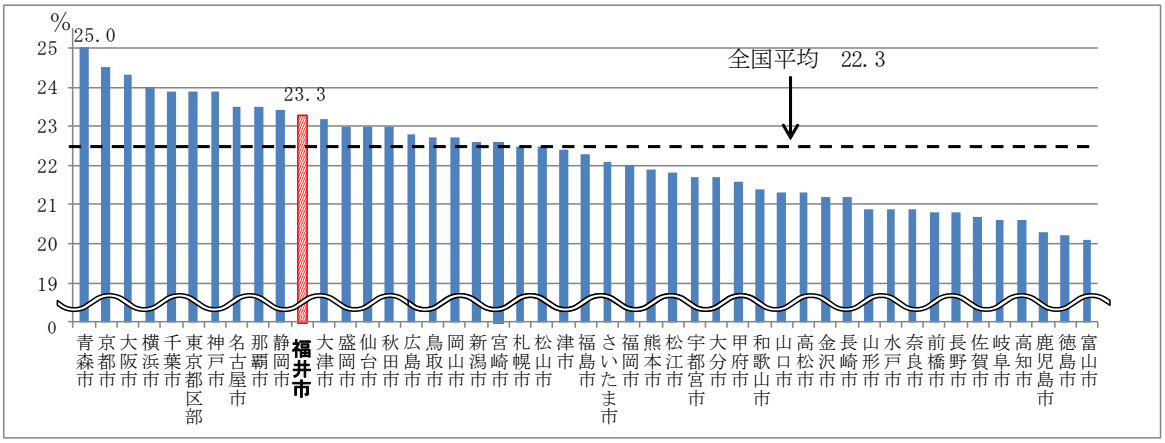
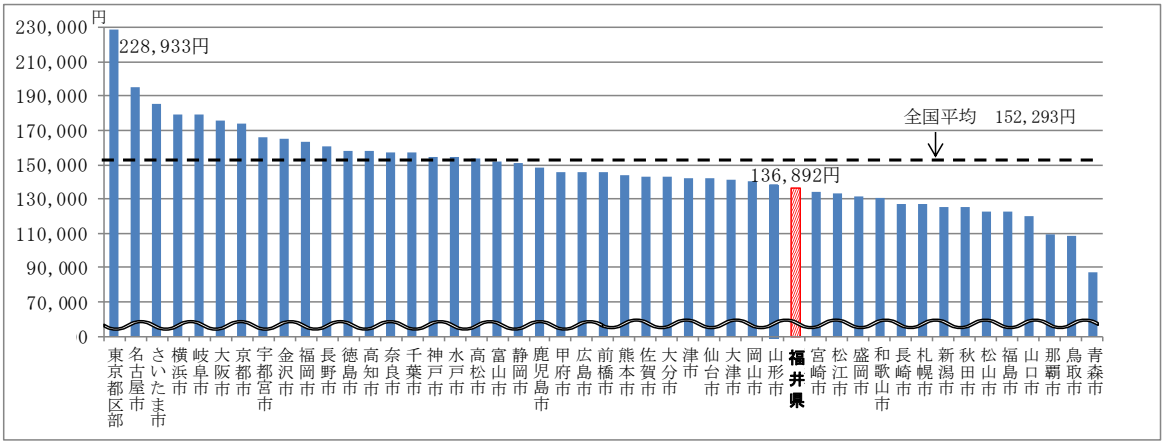


図３　都道府県庁所在市別の外食費

（平成２４～２６年の平均・二人以上の世帯）



高い黒字率

前節では、消費支出に占める食料品の割合が他県に比べて多いという話をしたが、ここでは、別の指標をみていきたい。「黒字率」は、家計の余裕の度合いを計ることができる。下記、②の式が黒字率を表す数式である。②の数式を構成するものとして、「可処分所得」「黒字」があり、「可処分所得」とは、実収入から税金、社会保険料など世帯の自由にならない支出（非消費支出）を差し引いた額、いわゆる手取収入のことを指す。また、「黒字」とは、可処分所得から消費支出を差し引いたものをいう（マイナスの場合は赤字を示す）。

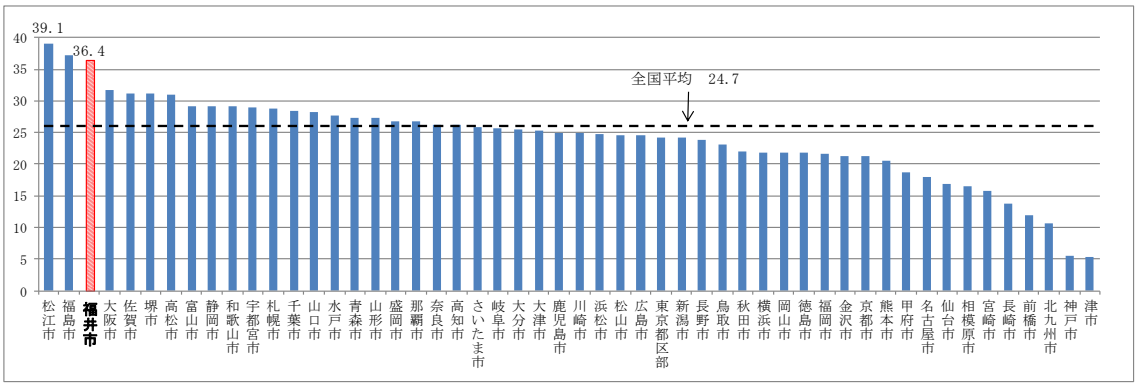
黒　字　率　＝　黒　　字　／　可処分所得　×　１００　…　②

平均消費性向　＝　消費支出　／　可処分所得　×　１００　…　③

可処分所得　＝　消費支出　＋　黒　　字　　…　④

図４は、全国の黒字率を割合の高い方から並べたグラフである。また、黒字率を使った指標として「平均消費性向」がある（数式③）。この指標も黒字率と同様に生活の余裕の度合いを表す指標であり、一般に収入の高い世帯ほど、消費性向は小さくなる傾向がある。また、消費支出がほぼ一定とすれば分母となる可処分所得が多くなるほど消費性向は小さくなる。

図４　都道府県庁所在市別の黒字率（平成２６年平均・二人以上の世帯のうち勤労者世帯）



では、実際に福井県のデータをみてみる。

図４の各都道府県の黒字率によると、福井県の黒字率は松江市、福島市に次いで全国第３位の 36.4%であった。これは全国平均(24.7%)と比べると 10%以上高い。この結果としては、さまざまな要因があると思うが、その一つがそもそもの世帯の収入が多いということが挙げられるだろう。

表１　都道府県庁所在市別の平均消費者性向
（平成２６年平均・二人以上の世帯のうち勤労者世帯）
（%）

１位	津　　市	94.7
２位	神　戸　市	94.5
３位	前　橋　市	88.1
	⋮	
全国平均		75.3
	⋮	
45位	**福　井　市**	**63.6**
４６位	福　島　市	62.7
４７位	松　江　市	60.9

世帯の実収入額は、570,140 円で、全国１０位である。一方で、消費支出は 304,400 円で全国 36 位であり、収入が多い割に消費支出が少ないことがわかる。ただし、世帯主１人の収入自体は 370,700 円で全国３６位であり、他の世帯員の収入、つまり家族収入などが「黒字」を大きくしている。

福井市の特徴　～食料品～

《油揚げ・がんもどき》

福井市の食料品における消費支出の最大の特徴は「油揚げ・がんもどき」である。平成２６年の世帯当たりの「油揚げ・がんもどき」購入額は、6,406 円で２位の金沢市（4,725 円）を大きく引き離し、家計調査が開始された昭和３８年から５２年連続で日本一になった（全国平均 3,114 円）。なぜ、「油揚げ・がんもどき」購入額がこれだけ長い間、首位を守り続けられたのか。そのひとつの要因として、道元禅師が開いた永平寺や、蓮如上人が開いた吉崎御坊のある福井県は、「信仰心が厚い」という地域性がある。表２は、各都道府県の寺院・神社数の合計値を多い方から順に５県並べた表である。この表から分かるとおり、福井県は１０万人当たりの寺院数が全国２位で、寺院数と神社数を合せた数についても全国１位と、非常に信心深い土地柄であることが窺える。古くから永平寺の修行僧が食べてきた魚介類や肉類を用いない「精進料理」には、油揚げをはじめとする大豆食品が貴重なタンパク源として用いられており、それが信仰心の厚い福井では一般家庭でも広まっていったのではないか、と言われている。

図５　都道府県庁所在市の「油揚げ・がんもどき」年間消費額

（平成２６年・二人以上の世帯）

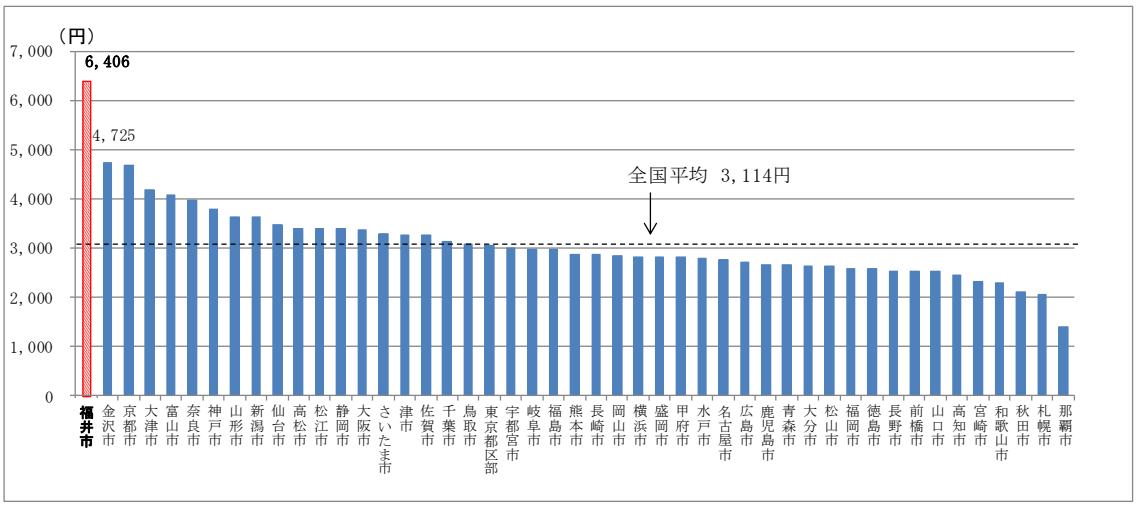


表２　各都道府県における寺院数および神社数

	寺院数+神社数			寺院数			神社数		
		10万人当たり	順位		10万人当たり	順位		10万人当たり	順位
福　　井	**3,410**	**428.93**	**1**	**1,692**	**212.83**	**2**	**1,718**	**216.10**	**2**
富　　山	3,886	361.15	2	1,600	148.70	6	2,286	212.45	3
島　　根	2,480	353.28	3	1,308	186.32	3	1,172	166.95	7
高　　知	2,544	341.48	4	370	49.66	33	2,174	291.81	1
滋　　賀	4,662	329.24	5	3,214	226.98	1	1,448	102.26	17

宗教統計調査（H25.12.31現在）（文化庁）

《その他の上位食料品》

表３は、平成２４年から平成２６年の３年平均の消費支出からみた福井市の年間購入額都道府県庁所在市別ランキング(食料品)上位をまとめたものである。「油揚げ・がんもどき」以外でランキング１位にある食料品は、「ふりかけ」「他の調理食品」「コロッケ」「カツレツ」「天ぷら・フライ」「やきとり」「他の調理食品のその他」「コーヒー飲料」である。「やきとり」「コーヒー飲料」を除いた食品の共通点としては食卓に並ぶおかずという点である。これには、福井の家庭事情が影響していると考えられる。平成２２年の国勢調査によると、

表3　消費支出からみた福井市の特徴(食料品)(都道府県庁所在市別)

1位	2位	3位	4位	5位
油揚げ・がんもどき	かに	こんぶ	粉ミルク	さしみ盛合わせ
ふりかけ	加工肉	調理食品	大豆加工品	他の魚肉練製品
他の調理食品	ソーセージ	コーヒー・ココア	ようかん	さといも
コロッケ	こんぶつくだ煮		アイスクリーム・シャーベット	
カツレツ				
天ぷら・フライ				
やきとり				
他の調理食品のその他				
コーヒー飲料				

福井県の共働き世帯割合は 36.44%で、全国平均 24.45%を大きく上回り全国第１位である。働く女性の多い福井県においては、手間暇のかからない調理食品が重宝されているのではないだろうか。ただし、他の共働き世帯割合の高い地域では、必ずしも調理食品の消費額が高いわけではなく、福井市の特異的な消費行動と考えられる。

また、福井のランキングをみると加工食品が多く並ぶがその他のランキングでは「福井県と言えば〇〇」という食料品が名を連ねている。「かに」「こんぶ」などの海の幸、「さといも」などの山の幸、「やきとり」や「ようかん（水ようかん)」と、どれも福井県が誇れるものである。

《アイスクリーム・シャーベット》

しかし、１位「コーヒー飲料」、４位「アイスクリーム・シャーベット」については、福井県とはあまりなじみがないように思う。まず「アイクリーム・シャーベット」についてであるが、表４のアイスクリーム・シャーベットの年間購入量をみると１位　金沢市 10,301 円、２位　富山市 9,593 円、４位　福井市 9,037 円と北陸勢が上位にランクインしている。石川県にいたっ

表４　ｱｲｽｸﾘｰﾑ・ｼｬｰﾍﾞｯﾄの年間購入額
（平成２４～２６年の３年平均）【円】

全国平均	7,904
金沢市	10,301
富山市	9,593
宇都宮市	9,394
福井市	**9,037**
鹿児島市	8,928
：	
岐阜市	7,285
松江市	7,104
宮崎市	7,034
神戸市	6,428
那覇市	5,935

ては最下位の那覇市5,935円の１．７倍も消費している。また、那覇市が最下位であり、日本で最も暑い地域にも関わらず、冷たいアイスクリームの消費が少ないという意外なデータとなっている。

表５　都道府県別の労働時間について

		総実労働時間（時間）	所定内労働時間（時間）	所定外労働時間（時間）	出勤日数（日）
全国		145.5	134.9	10.6	18.9
1	岩手	158.4	148.4	10.0	20.4
2	福島	156.2	145.0	11.2	19.8
3	山形	155.5	144.7	10.8	20.0
4	佐賀	155.0	144.6	10.4	19.9
5	青森	154.4	145.4	9.0	20.3
6	岡山	153.1	141.7	11.4	19.6
7	島根	152.7	143.0	9.7	19.8
8	香川	152.6	141.1	11.5	19.7
9	**福井**	**152.1**	**143.1**	**9.0**	**19.8**
10	熊本	152.1	142.1	10.0	19.8
			⋮		
38	愛知	145.8	133.8	12.0	18.6
39	滋賀	145.8	133.8	12.0	18.6
40	和歌山	144.3	135.6	8.7	19.4
41	大阪	142.8	132.6	10.2	18.7
42	京都	140.9	129.2	11.7	18.2
43	兵庫	140.9	130.9	10.0	18.5
44	千葉	139.8	129.2	10.6	18.5
45	埼玉	137.7	127.9	9.8	18.3
46	神奈川	137.6	127.2	10.4	18.0
47	奈良	137.1	128.9	8.2	18.5

毎月勤労統計調査（５人以上の事業所・平成２５年平均）

《コーヒー飲料》

次は「コーヒー飲料」である。家計調査では「コーヒー」「コーヒー飲料」の二つの項目を調査しており、「コーヒー」は5,071円で３９位であり、「コーヒー飲料」は6,101円で全国１位となっている。ちなみに「コーヒー」はコーヒー豆やインスタント等、固形・粉末状のもの、「コーヒー飲料」は缶コーヒーや紙パック等で販売されている液体のものを指す。また、大手チェーン店等喫茶店での消費は「喫茶代」として計上されている。

なぜ同じコーヒーなのにここまで消費順位に差があり、なおかつ「コーヒー飲料」が全国１位なのだろうか。これは、推測になってしまうが福井の人は、自宅でコーヒーをゆっくり飲むよりは、缶コーヒーでさっと済ましてしまう傾向があるのかもしれない。あるいは、表５でわかるように全国に比べ長い労働時間であるため、職場での缶コーヒーの購入量を増加させているのかもしれない。

図６　「コーヒー」と「コーヒー飲料」の年間購入額

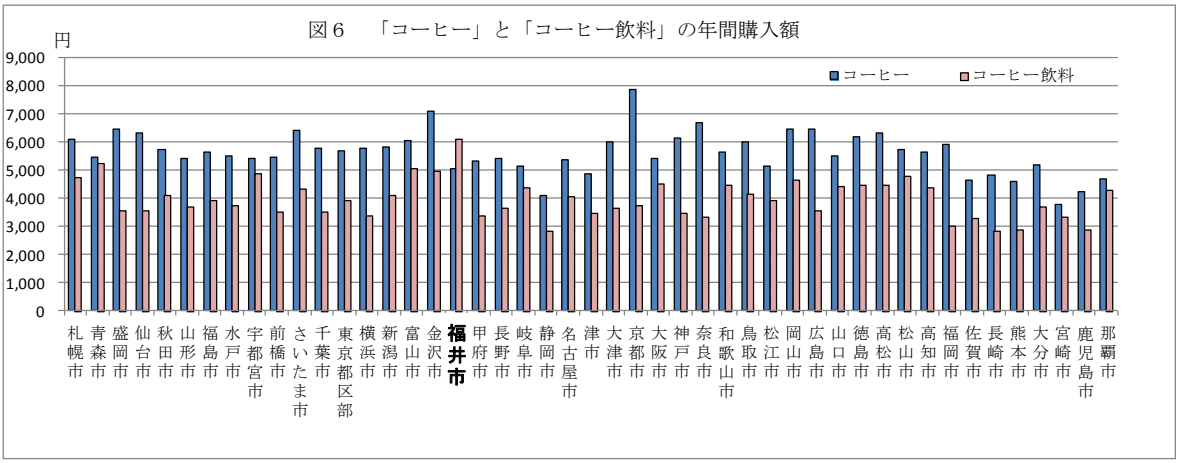
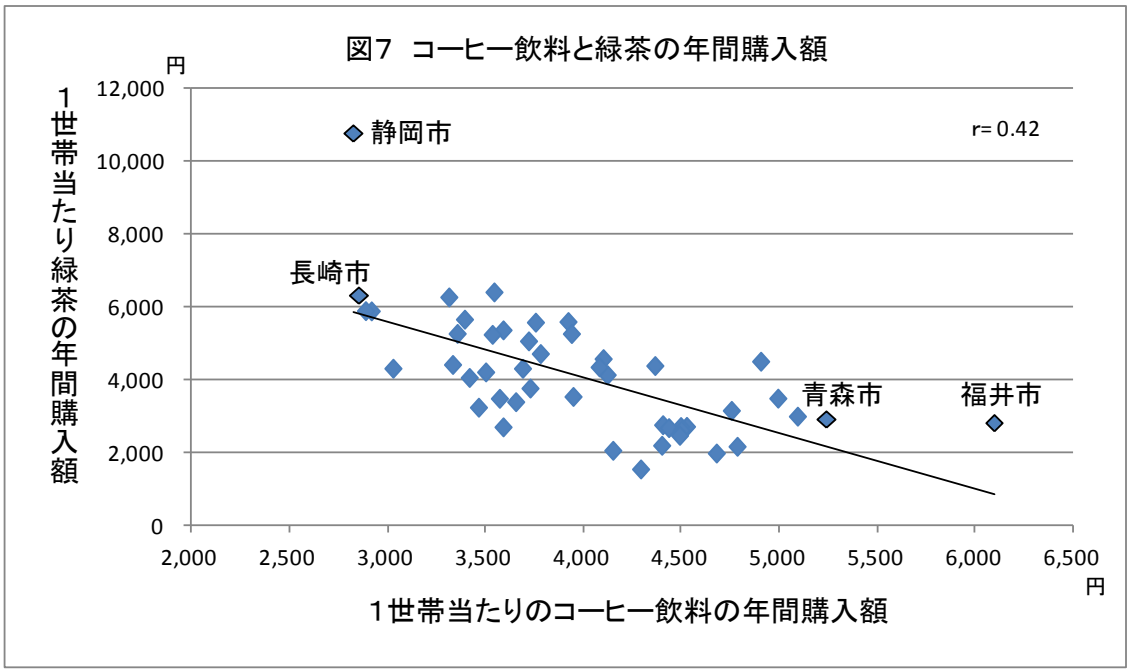


図７は、「コーヒー飲料」と「緑茶」の年間購入額について相関関係をみたものである。「コーヒー飲料」の購入額が多い地域は「緑茶」の購入額が少なく、反対に「緑茶」の購入額が多い地域は「コーヒー飲料」の購入額が小さいという負の相関がみえ、「コーヒー飲料」と「緑茶」は、代替品に近い性質を持っていることがわかる。特に静岡市は、「コーヒー飲料」の購入額は全国最下位であるが、「緑茶」購入額は全国１位とその消費行動がはっきりとみえる。



《ごぼう》

今までは、都道府県庁所在市別に購入金額の多い品目について述べてきたが、ここからは反対に購入金額の低い品目についてみていく。表６は、福井市のランキングが低い品目である。都道府県庁所在市別で最下位の品目として気になる品目は、「ごぼう」「弁当」「紅茶」である。

表6　消費支出からみた福井市の特徴（食料品）（都道府県庁所在市別）

47位	46位	45位	44位	43位
小麦粉	他のめん類	ほたて貝	かき（貝）	さんま
ごぼう	バター	レタス	かつお節・削り節	貝類
かぼちゃ	ピーマン	もも	他の野菜・海藻加工品のその他	キャベツ
酢	果実加工品	ジャム	調味料	バナナ
弁当	油脂	ワイン	ドレッシング	キウイフルーツ
紅茶	食用油		まんじゅう	乾燥スープ
	焼ちゅう		他の洋生菓子	他の飲料のその他
			うなぎのかば焼き	

まず「ごぼう」についてである。今年２月に発売された「和食は福井にあり」（平凡社新書）によれば、「福井県はごぼう王国でもある。日本最古のごぼうの種子は三方五湖畔の鳥浜貝塚で発見されているし、県央部の越前市は江戸時代は白茎白花種ごぼうの名産地だった。・・・ごぼう好きの DNA が県民に伝わっているのだろうか。」とあるように福井と縁があるにも関わらず、消費額は全国最下位である。また越前市においては、現在でも「ごぼう講」という豊作祈願の行事が執り行われており、生活の身近にあることには間違いない。しかし、農林水産省「野菜生産出荷統計（平成２５年確報）」によると福井県のごぼうの作付面積は、12ha で全国４３位である。他の都道府県についてもみてみると１位は青森県で 2,360ha、４７位は沖縄県 3ha（全国計 8,570ha）であった。江戸時代から３００年以上続いている「ごぼう講」という伝統を残していくためにも、日常の食卓へ浸透させていきたいものである。

《弁当》

次は「弁当」についてである。「弁当」の購入額は、福井市は 8,555 円で１位の那覇市 18,419 円と比べると約２分の１である。図８でわかるように弁当購入額と既婚率の関係をみると、強くはないが負の相関があり、既婚率の高さが弁当購入額の少なさの要因ではないかと考えられる。表７は、弁当購入額の上位と下位の購入金額および既婚率を並べた表である。これらをみると、家庭を持つ場合、どうしてもさまざまな支出が増えてしまうため、例えば昼食に販売されている弁当ではなく、家庭から持参した弁当で済ませることを節約のひとつとしているのではないだろうか。そして、前述のような理由で弁当の購入額を抑えているのであれば、福井の高い黒字率を支える一因と言えるであろう。

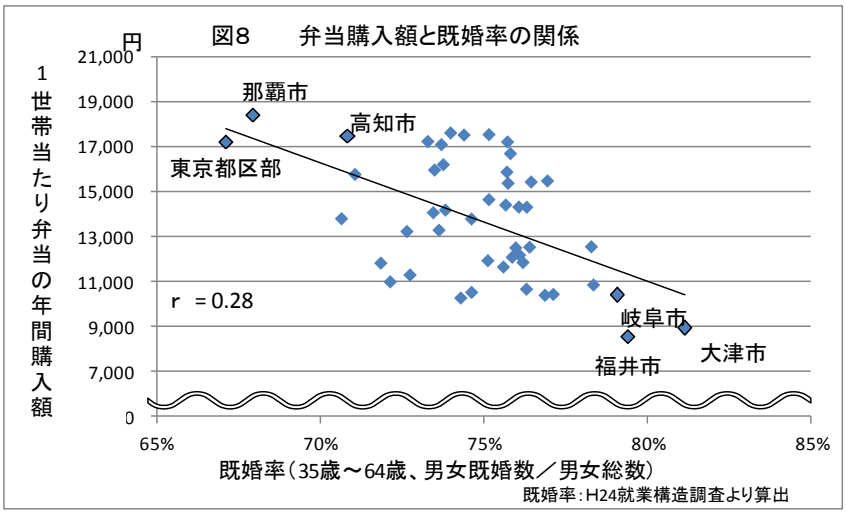


表７　弁当購入額の上位および下位と既婚率

	弁当購入額（円）	順位	既婚率	順位
全国平均	13,758		73.6%	
那覇市	18,419	1	67.9%	46
熊本市	17,609	2	74.0%	31
前橋市	17,535	3	75.2%	24
山口市	17,515	4	74.4%	29
高知市	17,492	5	70.8%	44
東京都区部	17,230	6	67.1%	47
⋮				
岐阜市	10,402	43	79.1%	3
富山市	10,393	44	76.9%	8
京都市	10,271	45	74.3%	30
大津市	8,940	46	81.1%	1
福井市	**8,555**	**47**	**79.4%**	**2**

福井市の特徴～食料品以外～

《こづかい》

ここからは食料品以外の支出についてみていく。

まずは、福井市のこづかい事情である。表８は都道府県庁所在市別の年間こづかい総額についてまとめたもので、福井市の「こづかい」をみると、平成２６年の年間額は全国４位、平成１９年から平成２６年までの平均額でみると全国で２位である。ランキング上位の他県庁所在市をみると意外にも地方ばかりで、上位５つの県庁所在市については、毎年ほぼ同じ自治体である。表９は、平成２５年平均の定期給与と「こづかい」についてまとめたものである。これをみると収入の多さとこづかいの多さには関係がなさそうである。また、実際に平成２５年平均の定期給与と「こづかい」の相関係数は 0.0001 であり、無関係ということが言える。

表８　都道府県庁所在市別の年間こづかい総額について【円】

	H26	順位	平均額（H19～）	順位
富　山　市	330,152	1	359,778	1
福　井　市	**199,819**	**4**	**300,772**	**2**
高　松　市	274,455	2	265,997	3
高　知　市	242,760	3	236,266	4
鹿児島市	171,031	5	211,660	5
全国平均	124,416		152,306	

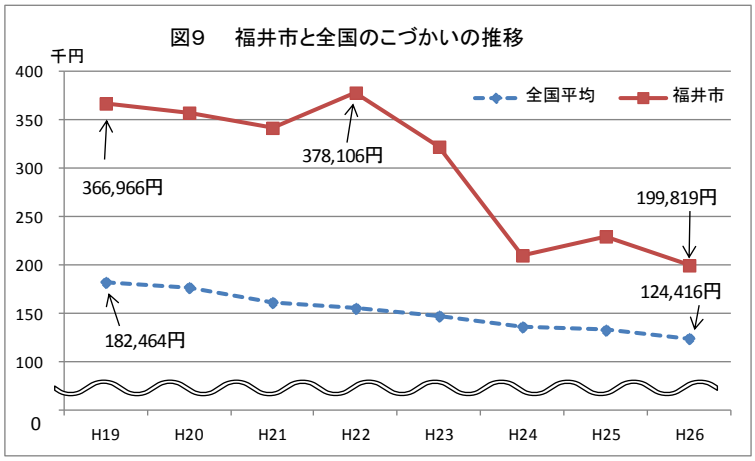
表９　定期給与の上位５都道府県および福井県のこづかい【円】

	定期給与（1か月平均）	こづかい（年間）	こづかい全国順位
東　　京	330,137	119,585	23
大　　阪	272,182	79,600	37
愛　　知	269,971	99,190	34
神奈川	266,691	163,950	17
三　　重	260,417	120,702	14
	⋮		
福　　井	**246,034（19位）**	**199,819**	**4**

定期給与：毎月勤労統計調査H25年平均より

さらに特徴的なことは、福井市の場合「世帯主へのこづかい」が少ないことである。平成１９年からの平均では 96,923 円で全国４１位（全国平均 114,013 円、全国１位・高松市 169,679 円）であるし、順位の変動はあるものの全国平均を上回ることはなかった。反対に、「世帯主以外へのこづかい」は 203,848 円で全国２位であった。一世帯当たり世帯人員（平成２６年平均 3.26 人）が多いことがひとつの理由かもしれない。

図９は、福井市と全国のこづかいを時系列に並べたグラフである。前述したように、福井市は全国平均を常に上回っている。しかし、平成１９年では全国平均と 184,502 円の差があったものの、差は徐々に縮まっていき平成２６年には全国平均との差が 75,403 円になった。また、福井市、全国とも「こづかい」は減少傾向にあり、特に福井市では平成１９年の約２分の１で、こづかい事情はかなり厳しくなっている。



《電気使用量》

最後は電気使用量である。福井県嶺南地域には原子力発電所が多く所在し、他府県に多くの電気を供給している。しかし、福井県は電気の消費量も非常に多い。家計調査では、調査項目によっては支出金額以外に使用量も調査しており、今回はその使用量のデータを利用する。

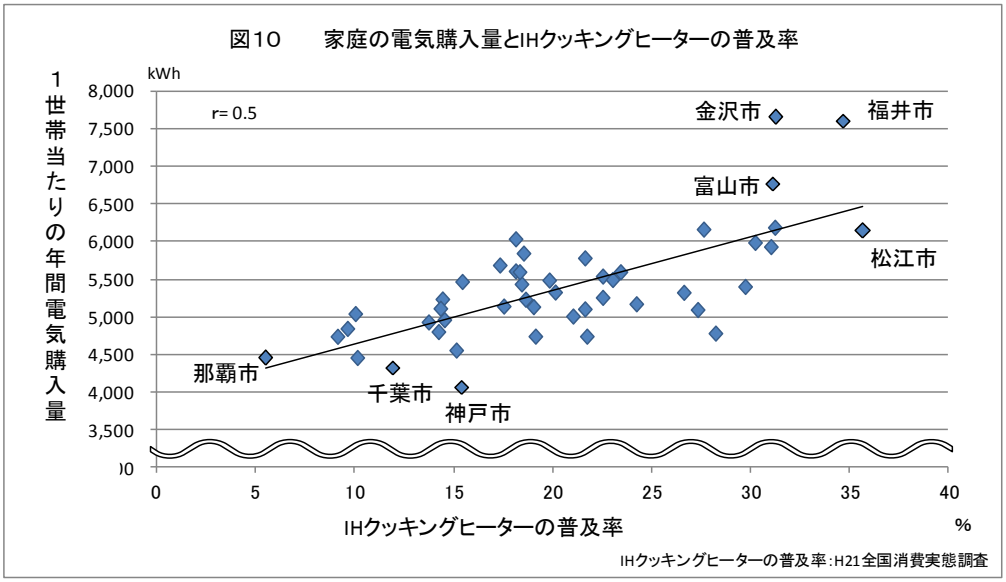
表１０　電気購入量ランキング
（平成２４～２６年の３年平均）【kWh】

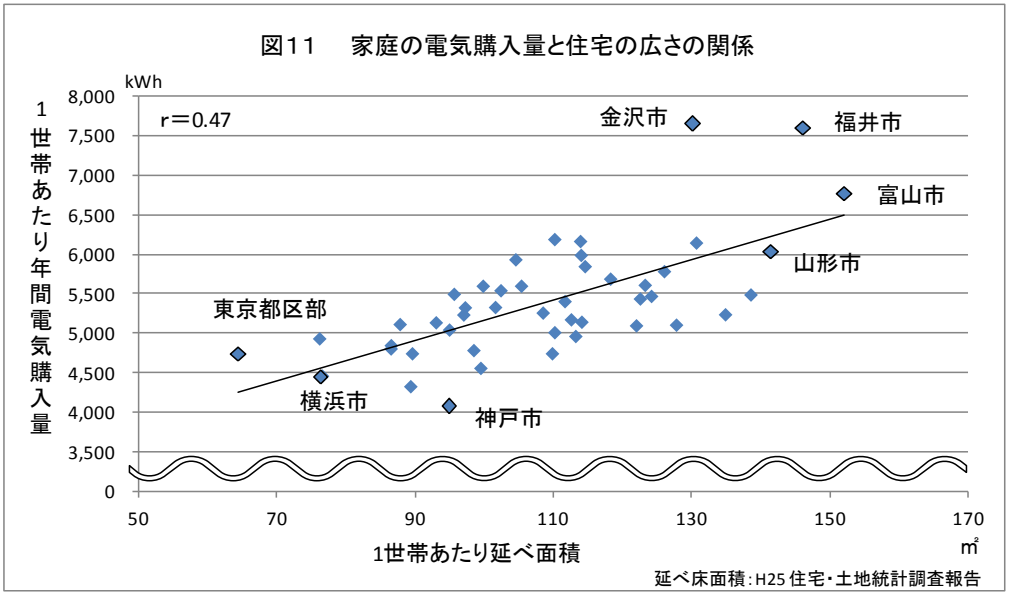
1	金　沢　市	7,649
2	**福　井　市**	**7,605**
3	富　山　市	6,765
	⋮	
45	那　覇　市	4,453
46	千　葉　市	4,320
47	神　戸　市	4,067

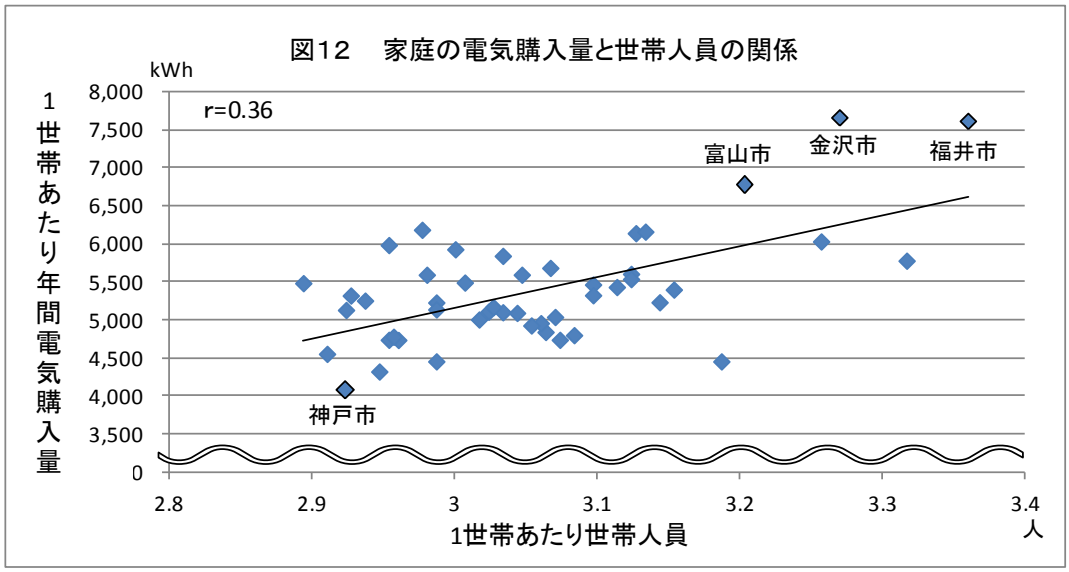
福井市における１世帯当たりの１年間の購入量（平成２４年～平成２６年平均）は、7,605kWh で全国２位である。他の都道府県庁所在市をみると、消費量トップ３は、北陸３県庁所在市で占めている。下位には、東京都区部・横浜市・神戸市といった都市圏が並ぶ。図１０は「家庭の電気購入量と IH クッキングヒーターの普及率」について、図１１は「家庭の電気購入量と住宅の広さの関係」について、図１２は「家庭の電気購入量と世帯人員の関係」についてそれぞれ散布図を作成した。

まず図１０について、IH クッキングヒーターの普及率とオール電化の普及率を同等の数値と仮定すると、一世帯当たりの年間電気購入量との相関係数は 0.5 で正の相関がある。北陸３県の県庁所在市では生活に必要なエネルギーを電気で賄う家計の割合が多く、電気購入量が多くなるようである。次に、図１１は住宅の広さとの相関でその相関係数は 0.47 で正の相関がある。一世帯当たりの延べ面積が大きいということは、特に夏季や冬季の室内温度調節に電気を多く使うことになるのではないだろうか。最後に、図１２は一世帯当たりの世帯人員との相関で相関係数は 0.36、IH クッキングヒーターや住宅の広さに比べる

と弱いがこれも正の相関関係がある。福井ないしは北陸地方の電気購入量が全国に比べて多いことは、①オール電化の普及率の高さ、②一世帯あたりの住宅の広さ、③一世帯あたりの世帯人員の多さの３点が主な要因であると考えられる。







《まとめ》

以上のように、家計という観点から福井にはさまざまな特徴が存在することがわかった。今回は、食料品やそれ以外について数項目だけを記載したが、家計調査においては約 700 項目を調査しており、まだまだ多くの特徴が存在するだろう。興味のある方は是非、総務省統計局所管「政府統計の総合窓口 e-stat」を利用し、データに触れていただきたい。

今回は、主に家計調査という生活に身近な調査のデータを利用したが、現在、国や各都道府県が多くの調査を行っており、多種多様なデータが蓄積されている。そのデータを利用することで都道府県それぞれの特徴を映し出すことができる。

北陸新幹線開業を機に全国から“北陸”に熱い視線が注がれている。様々なデータを活用して本県の特徴をＰＲし、観光客の皆様に福井の“生活文化”も感じとっていただきたい。